

## 信仰と職業

—— 両大戦間期フランスにおける女性教師「ダビデ」の世界 ——

前 田 更 子

【要約】 敬虔なカトリックの女性信者は、ライシテに価値を見いだすフランス共和国で何を考え、どのように生きたのだろうか。それが国民統合の使命を担った公立学校の教師だったとするとさらに問題は複雑であろう。本稿では、アルプスの山岳地帯を拠点とし、主に両大戦間期に活動した女性カトリック・グループ「ダビデ」を取り上げる。彼女たちのネットワークは雑誌や図書館制度、巡礼を通して全国に広がり、一九二〇年代末には公立小学校に勤務する女性教員の一割ほどを惹きつけた。共和国の小学校教師としての使命を果たしつつ信者として生き抜くことは、ダビデにとって両立可能であり相互補完的でさえあった。共和国とカトリシズムとともに、彼女たちに人との親密なつながりをもたらし、自己を主張し防衛する手段をも与えた。本稿では、第三共和政期フランスの小学校教師の日常生活を明らかにし、宗教の社会的意義をジェンダーの視点から考察する。

史林 一〇四卷一号 二〇二二年一月

### はじめに

一九二〇・三〇年代のフランスでダビデ Davide という女性名は特別な響きを持っていた。第一次世界大戦中の一九一六年に南アルプス地方の巡礼地ノートル・ダム・デュ・ローで、ダビデの活動は始まった。ルネ・バザン (René Bazin, 一八五三—一九三二) の小説『ダビデ・ピロ』(一九二二年)<sup>①</sup>の主人公に魅了された女性教師たちが、互いの交流のためにダ

ビデと称するサークルをつくりうと決めたのである。彼女たちはバス＝ザルプ県（現在のアルプ＝デー＝ゾート＝プロヴァンス県）の山間部で働く二〇代前半の教師であったが、雑誌『オー・ダビデ Aux Davides（ダビデたちへ）』はしだいにフランス国内外に読者を持ち、その存在が下院で議論されるまでになった。

ダビデと自称し、またそのように呼ばれた教師たちの特徴は、次の三点である。師範学校出身の公立小学校の教師であること、カトリックの信仰を強く持っていること、そして女性（多くは独身）であること、である。

一九二〇年代と言えば、フランスでは公立小学校の世俗化からすでに三〇年以上が経過し、政教分離も制度化されていた時代である。公立の小学校教員の間では組合運動が盛んで、社会主義や共産主義が一定の影響力を持っていた。他方で、カトリック教会は相変わらず、公立学校を「悪魔の学校」と断罪し信者には公立校を禁止し、カトリック系私立学校へ行くよう勧めていた。共和派とカトリック教会の対立構図の中で、ダビデは無神論的傾向の強い左翼の小学校教員組合運動からも、またカトリック教会の司祭たちからも批判を受けた。激しい批判にさらされ、彼女たちは自己の正当性を主張し始める。公教育のライシテとは何か、一八八〇年代に制度化されたこの原理をめぐって教育現場で、さらには議会でも議論が続いていた。<sup>②</sup>

公教育の世俗化以降における公立教師の信仰の問題はこれまでほとんど歴史家の関心を惹いてこなかった。よく知られているようにフランスの公立学校は、共和派とカトリック教会との長く熾烈な争いの末に、宗教的に中立なライシテの間として一八八〇年代に整備された。<sup>③</sup>そこで教鞭を執る者は、公立の師範学校出身で、金色の棕櫚の葉をかたどった紋章の入った黒のフロックコートを身につけた姿から「黒い軽騎兵」との異名を持ち、国民の文化統合に向けてフランス語や科学的知識を国土の隅々にまで広め、共和主義的公民を教化する役目を負った共和国の「宣教師」として描かれてきた。また両大戦間期の教師については、それらの特徴に加えて平和主義者、組合運動に身を投じた社会主義者、活動家としての側面が強調される。<sup>④</sup>しかし、師範学校での教育が非宗教的なもので、職場がライシテの空間だったとしても、それは教

師が無神論者であることを意味するわけではない。個人の信仰は別の次元の問題として捉える必要があるだろう。熱心な信者である個人は、ライシテに価値を見いだすフランス近代国民国家へどのように適応していったのであるのか。以上が、筆者がダビデ研究を始めた理由である。

ジェンダー特集号に寄せる本稿においては、上記のような問題意識に加えて、ダビデが女性であったことの意味を問うてみようと思う。したがって、ダビデの運動の中心にいた女性教師たちがどのような環境で日常を過ごし、信仰と職業に向き合っていたのか、自らの女性性をどのように捉えていたのかというミクロな世界を論じていくことになる。史料としては、雑誌『オー・ダビデ』に加えて、ダビデの中心メンバーが残した書簡やインタビュー記録などを主に用いる。

ところで、二〇世紀フランスの敬虔な女性教師を研究することに、いったいどのような意義があるのか。宗教とフェミニズムという組み合わせはおそらく自明ではない。宗教の中でもとりわけ伝統宗教のカトリックは、封建制との結びつきが強く、自由・平等の近代的価値に反し、個人の自律を妨げる存在だとみなされてきた。イヴはアダムのあばら骨からつくられたという聖書の解釈をめぐっては議論があるが、現実問題としてカトリックが女性司祭を認めず、司祭の妻帯を禁止し、避妊に関して消極的な態度を示し、ヴァチカンを頂点とする家父長的性格の強い世界であるのは事実である。その点からすれば、男女平等を求め、家父長制に抗うフェミニズムとは相容れる要素が少なそうだ。しかし、人類学の分野からは、宗教におけるフェミニズムのあり方に着目する研究がいくつも発表されてきている。それらが提起するのは、「完全な世俗主義が、女性の尊厳を保障する代替案」ではないということであり、女性たちの経験や取り組みについて細かく分析することの重要性である。<sup>⑥</sup>この見方は、ポストコロニアル的視点から、すなわち非西洋女性を土着の家父長制の受動的な犠牲者とみなした、西洋のコロニアル・フェミニズムへの抗議から生まれたものであるが、ひるがえって近代西洋世界の女性と宗教の関係性を考察する際にも有効であろう。また近年、日本における西洋近代史の分野においても、これまで近代の「対抗勢力」や「敵対者」とみなされ、近現代史研究に正当な位置をもちえなかったカトリシズムを、再検討

しようとする試みが始まっている。そこでは近代国民国家と教会との関係性について両者の対抗の側面だけでなく、歩み寄りや融和のプロセス、相互補完や役割分担の仕組みをも視野に入れて解明する必要性が説かれている。<sup>⑦</sup>この問題意識は本稿でも共有される。

公教育のライシテ原則が確立していたフランスの両大戦間期において、女性たちが私立校ではなく公立校に勤めながらカトリックの敬虔な信者として生きたとすれば、それはなぜなのか。宗教は女性の自己実現あるいは自己防衛の手段であり得たのだろうか。アルプスの山間部で教職と信仰に人生を捧げ地道に生きた女性たちを、「保守」「伝統」として切り捨てることなく、その取り組みや思想の意味を両大戦間期のフランスの文脈に位置づけながら考えてみたい。

① René Bazin, *Dauides Birot*, Paris, C. Lévy, 1912.

② Jean Guilton, *Les Dauides, Histoire d'un mouvement d'apostolat latin, 1916-1966*, Tournai, Casterman, 1967. 著者ジャン・キートンは、一九二六年からダビデの活動に参加し支援を続けたカトリックの哲学者で、アカデミー・フランセーズの会員にも選出された知識人である。ダビデ運動のリーダー、マリ・シルヴへのインタビュー記録が収められた本書では、自身とダビデとの関わりのほか、グループの歴史とその意義が叙述されている。

③ 谷川稔「十字架と三色旗——近代フランスにおける政教分離」岩波現代文庫、二〇一五年。

④ Jacques Ozouf et Mona Ozouf, *La République des instituteurs*, Paris, Seuil, 1992; Mona L. Siegel, *The Moral Disarmament of France, Education, Pacifism, and Patriotism, 1914-1940*, New York, Cambridge University Press, 2004; Jacques Girault, *Pour une école laïque du peuple : les instituteurs militants de l'entre-deux-guerres en France*, Paris, Publisud, 2009; Anne-Marie Sohn, « Institurices », dans Christian Bard et Sylvie Chaperon (dir.),

*Dictionnaire des féministes, France XVIII<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècle*, Paris, PUF, 2017, p. 756-758; Anne-Marie Sohn, « Exemplarité et limite de la

participation féminine à la vie syndicale : les institurices de la C.G. T.U. », *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, tome 24, n°3, juillet-septembre 1977, p. 391-414; 上垣豊『規律と教養のフランス近代——教育史から読み直す』(リネルヴァ書房、二〇一六年)の主に第七章を参照。また、両大戦間期の女性教師として日本で名が知られているのはエミリ・カルルであろう。カルルはダビデの拠点と同じアルプス地方の農村部で、周囲の無理解と戦いながら勉学に励み教師となる。兄を第一次世界大戦で亡くした経験から教会に対し懐疑的となり、同時に終生、平和主義者として生き抜いた(長谷川イザベル著・長谷川輝夫訳『共和国の女たち——自伝が語るフランス近代』山川出版社、二〇〇六年; Émilie Carles, *Une soupe aux herbes sauvages*, Paris, J.-C. Sinoën, 1978)。

⑤ 山口里子「キリスト教」田中雅一・川橋範子編『ジェンダーで学ぶ宗教学』世界思想社、二〇〇七年、四七頁。

⑥ 川橋範子・小松加代子編『宗教とジェンダーのポリティクス——フ

エミ・ニスト人類学のまなざし』昭和堂、二〇一六年、九〇―一二頁。  
 ⑦ 中野智世「序」中野智世・前田更子・渡邊千秋・尾崎修治編『近代

ヨーロッパとキリスト教―カトリシズムの社会史』勁草書房、二〇一六年を参照。

## 第一章 アルプス山間部の女性教師の日常世界

### ダビデの誕生と中心メンバー

第一次世界大戦さなかの一九一六年九月、巡礼地ノートル・ダム・デュ・ローでダビデは生まれた。バス＝ザルプ県で暮らす二〇代前半の女性教師六人が、五四歳のメラニ・ティヴォル（一八六四―一九一八）と出会ったことがきっかけである。<sup>①</sup>ティヴォルは長年、ドローム県クレの上級講座 *cours complémentaire* の校長であったが、このときすでに退職しており、元教え子たちとノートル・ダム・デュ・ローまで巡礼にきていた。通信手段が限られる中、意気投合した彼女たちは、「互いに助け合い、女性教師としての義務をよりよく果たし、自分たちの宗教をよりよく知る」ことを目的とし、雑誌をつくろうと決意する。それがその後、三〇年にわたって続くことになる『オー・ダビデ』である。<sup>②</sup>

六人の新米の女性教師とは、マリ・シルヴ（一八九四―一九七六）、ローズ・ロジエ（一八九四―一九七〇）、マリ・ブレス（一八九四―一九六二）、マリ・レイデ（一八九三―没年不明、一九二七年に退職）、マルト・ジリー（一八九四―没年不明、第二次大戦後も存命）、ルイズ・ユーク（一八九〇―一九一七）である。シルヴ、ロジエ、ブレス、レイデは一九一三年にデューニユ女子師範学校を卒業した同期生であり、ジリーは一学年下、ユークは三学年上であった。<sup>③</sup>多くはバス＝アルプ県の中でもっとも自然が厳しい北東部のアルプス山岳地帯の小学校教師であり、日頃から連絡を取り合う仲だった。六名のリーダー的存在はマリ・シルヴである。シルヴは、一九一三年一〇月にユベイ谷 *Ubaye* にあるフルス村のサン＝ローラ小集落に赴任した。その後、一九一九年に故郷のセーヌ村の小集落サン＝ポンスに異動となり一九五二年まで勤め上げ、

この地で生涯を閉じた。勤務地がわずかに二ヶ所というのは、小学校教師としては異例である。

アルプーデーゾートロヴァンス県文書館に保管されている国勢調査に基づき、彼女たちの社会的出自を調べると、シルヴ、レイデの父はともに農業従事者、ロジエの父はパン職人であったがローズ・ロジエが幼少期に死去し、同居していた祖父は元郵便配達員、母は仕立屋であった。プレスとジリーの父はともに県内の公立小学校教師、ユークの父は運搬用家畜の備品製造職人であった。<sup>④</sup> またわかっているだけでも、六名のうち三名には聖職者の家族がおり（シルヴには司祭の叔父、ユークには司祭の兄、ロジエには修道士の兄、カトリックの家庭環境に育ったことが推察される。

マルト・ラガルド（一八九八一―一九七二）にもここで言及しておこう。彼女は一九一六年九月のノートル・ダム・デュ・ロー巡礼には同行しなかったものの、一九二〇年代にはダビデ運動の主要メンバーとなり、晩年までシルブとともに多くの記事を執筆することになる。シルブより四つ年下で、最初の赴任地がフルス村のバイヤス小集落、つまりシルブの学校兼住居と徒歩で行き来できる距離にあった。彼女もキャリアを通じて二校でしか教えておらず、バイヤスの次に赴任した小集落の小学校には三五年間とどまった。父は農業従事者であり、マルトは四人兄弟の末っ子だったが、家業を継いだ長男以外はみな小学校教師となっている。彼女の家庭は宗教実践に熱心だったわけではない。<sup>⑤</sup>

バス＝ザルプ県はイタリアに接し、パリからは八〇〇キロメートルと遠く離れ、二〇世紀初頭には人口減少に悩まされた。ル・ブラスとブラールの調査によれば、宗教実践率は県全体としては低かったが、ダビデの拠点ユベイ谷周辺に限っては例外的に高かった。<sup>⑥</sup> 一方で、都会を好む教育修道会がこの地に根付くことはなく、カトリック家庭の娘といえ公立校に向かうのはごく自然で、とくに民衆層の子どもにとって無償の師範学校への進学は社会的上昇の確かな方法であった。また、ユベイ谷にもっとも近い町バルスロネット周辺の男性たちは一九世紀半ばから職を求めて地元を離れ、フランスの都市部だけでなく、外国とりわけメキシコに移住したことで知られている。<sup>⑦</sup> こうして、若い男性が少ない土地柄のため、必然的に初等教員の女性率は高くなり、一九〇一年にはバス＝ザルプ県の公立小学校教員の半数以上が女性となった

いた。第一次世界大戦中の一九一八年には県内の公立小学校の教員数は男性一八八名、女性五〇七名である<sup>⑧</sup>。

#### ダビデのリーダー、マリ・シルヴ

マリ・シルヴは、グループの最年長者だったメラニ・ティヴォルの死後、訪ねた部屋の様子にショックを受け、自分の書類についてはすべて処分しようと決めたいらしい。「手紙にはその瞬間だけの真実が含まれているから、燃している」とも述べている<sup>⑩</sup>。したがって、ダビデに関する史料は彼女の親族の元には残されていないが、エマニュエル・ムニエ（哲学者、『エスプリ』誌創刊者）とジャン・ギトン（哲学者、アカデミー・フランセーズ会員）が一九二九年にマリ・シルヴに対して行ったインタビュー記録、ギトンが記したダビデ運動に関する著作、さらに国立文書館のジャン・ギロー（日刊紙『ラ・クロワ』編集長）文書に分類されたシルヴの手紙などが彼女を知り手ばかりになる。

マリ・シルヴは敬虔なカトリックの家庭に生まれた。とりわけ父親は厳格で、マリに日曜日には必ず教会へ行くよう言い聞かせていた。遠足のせいでたった一回ミサを休んだ体験を子どもはひどく後悔し続けた。マリにとって師範学校への入学は不安を伴うものだった。郷里のセーヌ村の司祭には反対され、師範学校に入ると信仰が失われると散々聞かされていたからである。

一九一〇年秋の入学後まもなく、マリは生涯の友となるローズ・ロジエと悩みを共有する。諸聖人の祝日に、二人は教会で秘跡を受けたいと校長レイノーに申し出て認められる。マリ・シルヴの回想によれば、その半年後の聖霊降臨祭には八名が一緒に外出したという。この校長から、シルヴは教師としての使命と義務、批判的精神、そして教師の美德である忍耐・謙虚さ・慈愛・勇気を学んだと、のちに師範学校での教育を高く評価しているが、同時に校長による道德教育のせいで自分と家族の信仰を再検討せざるを得なくなっただとも述べる<sup>⑪</sup>。家庭の伝統としてのカトリック信仰と共和国の師範学校での教育、この二つの間でシルヴは葛藤を抱えたまま勤務地へと赴く。

シルヴが一九一三年一〇月に着任したフルス村サン＝ローラン小集落は、バルスロネットから約二〇キロ離れ（徒歩で三時間半程度<sup>12</sup>）、標高一八四〇メートルほどの山岳地帯にあった。シルヴはここで五歳から一五歳までの二〇名ほどの生徒を受け持った。当時のフランスの小学校教育は男女別学が基本であったが、人口の少ない村では共学が認められており、シルヴの学校もその一つだった。また、一八八六年のゴブレ法によって、共学校に赴任する教師は女性と定められていた<sup>13</sup>。シルヴが後年、ジャン・ギトンへ語ったところによると、最初の一年は、留保していた信仰の問題について考え込むような出来事もなく過ぎた。「私たち「シルヴとフルス村のほかの女性教師たちのこと」<sup>14</sup>はミサに通っていました。冬場でも近隣の小教区に通いました。自由になる時間の大半は家庭訪問や、女性の大人だけでなく男性の大人向け教育に費やしました。私たちは校長から繰り返し受けていた、〈若々しさを失わないように〉という助言どおりに〈自らの人生を捧げ〉ようと務めていました<sup>15</sup>」。回想録という性質上、史料批判の問題がついてまわるが、教会には定期的に通い、空いた時間を使って地元住民への成人教育を行う、そうした日常を過ごしたと述べている。

シルヴが教師となつて初年度の夏の休暇は、第一次大戦開戦直後とあつて、村人とともにあり村人を励まし助けるようにとの公教育省の命令に従い、シルヴもサン＝ローランにとどまった。ルネ・バザンの小説『ダビデ・ピロ』を読んだのはこの夏のことだった。フルスの小教区に一九一四年八月一五日にやってきた司祭シニョレが、彼女に教冊の本を貸したのである。彼女の言葉を信じるのであれば、シルヴは最初、『ダビデ・ピロ』のプロットと師範学校の描写に不満を抱いたが、ほかの教師仲間に戻したところ周りでは大変うけがよく、意見交換を始めたという<sup>16</sup>。

では『ダビデ・ピロ』とは、いったいどのような物語なのか<sup>17</sup>。主人公のダビデ・ピロはラ・ロッシェル近郊の村に生まれ、教会に懐疑的な家庭に育つ。恋愛に苦悩もするが、何よりも小学校教師として地元の人びとに尽くし、世俗教師の立場を貫き教会には行かず、生徒に世俗道徳を教えることに熱心だ。しかし、病により死に直面した生徒を前に死後の世界をどう語るのかで苦しみ、最後には教会とも和解するというストーリーである。元々信仰のある家庭に育ったシルヴのよ

うな教師がヒロインに完全に自己投影することはなかったと考えられるが、教師としての義務や責任、地元の人びとへの愛と献身、さらに信仰と道徳の間での葛藤という点では、多くのカトリック教師の共感を得やすい物語だったのかもしれない。『オー・ダビデ』の雑誌名を考案したのは、ルイーズ・ユークダだとされている。

### ユベイ谷の「神聖同盟」

「フルス村には世間から離れ、孤独の中、神のそばで生きられる魅力があった。この魅力が私を捉えて放さなかった」と、シルヴは一九二九年にムニエに語った<sup>18</sup>。孤独はダビデの原動力である。ノートル・ダム・デュ・ローがダビデの象徴的な拠点である一方、ユベイ谷フルス村はダビデたちの友情そして闘いの物語の出発点である。マリ・シルヴは一九一三年から一九一九年まで、四つ年下のマルト・ラガルドは一九一七年から一九二〇年までそこで働き暮らした。以下では、ラガルドの手紙と彼女がレティシアというペンネームで書いた文章を元に、当時のユベイ谷の様子を再現してみよう。

一九二一年の国勢調査によると、フルスは六六世帯、人口二二名の小村で、いくつもの小集落から構成されていた<sup>21</sup>。村の中心はマリ・シルヴが勤務したサン＝ローラン小集落であった。一八八〇年代のジュール・フェリーによる公教育改革の成果として当時のフランスには人口の少ない集落にも小学校が存在し、一九一七年当時のフルス村には四校の共学校が存在した。シルヴが勤めたサン＝ローラン校のほかに、ラガルドが赴任したバイヤス校、ブロンンのヴィラルール・ダバス校、ルブルのル・コレ校である（現在はすべて廃校）。学校はそれぞれに二キロほど離れていたが、各小集落に配属されていた四名の女性教師は木曜日と日曜日に集まり、夕べをともに過ごしたり泊まったりした。フルスから二〇キロほど離れた谷を一つ越えたところにあるユヴェルネ村のレ・ザニユリエ小集落の教師フォールともバルスロネットで落ち合い、またときに訪問し合った。マリ・シルヴは彼女たちの中で最年長ですでにここでの生活に慣れ、教師としての経験も生活に関する情報も持ち、着任したばかりの女性教師たちの手本となった。ラガルド、ルブル、フォールの三名はディーニュ師範

学校を一九一七年に卒業した同期生であり、ヴィラール・ダバス校のブロンは一年先輩であった。<sup>22)</sup>この四名は全員ダビデであると、一九二六年にマルト・ラガルドが証言している。厳しい自然に囲まれた山の中での一人暮らしで、食料を集めるにも苦勞する環境の中、師範学校を出たての彼女たちにとって同じ境遇に置かれた先輩や友人との交流が心の支えとなったことは、以下に引用する両親宛てのラガルドの手紙からもよく伝わってくる。

「月曜日の夜、ジャンヌ・ルブルがうちに泊まりにきました。「私の着任後」シルヴさんなしで夜を過ごすのは初めてで、悪いことに風が強く、ストーブが驚くほど勢いよく煙を吐いていました。(……)結局、何事もなかったのですが、私たちはすぐにでもシルヴさんに会いたくなり、翌日「彼女のサンローランの家へ」また行きました。彼女も私たちが戻ってくるのを楽しみに待っていたと言ってくれました。(……)今晚ジャンヌがまたうちに泊まりにきます。明日には彼女のお姉さんがやってくるはずなので、もう泊まりにくるよう誘うことはできなくなります。でも、彼女のところには大きなベッドがあるので、私があちらに泊まりに行くことはできます。雪が降らない限り、私たちはできるだけ行き来するはずだ<sup>23)</sup>」。「木曜日は四人で、「バルスロネットから山道を登り到着する」最初の小集落ヴィラール・ダバスの教師の家で過ごしました。明日はみんなでサンローランに集まります。私たちの間柄は、さながら〈神聖同盟〉です。ほんとうに、私がおこに馴染むことができたのは、まったくそのおかげなのです。<sup>24)</sup>「私たち二人「マルトと兄のデジレのこと」は、シルヴさんに心から、とこしえに感謝しています。彼女は母親同然に優しく接してくれました。<sup>25)</sup>シルヴにすっかり魅了されたラガルドはこのとき一九歳、シルヴは二三歳である。

雪深い山間部にあつては、冬の間はバルスロネットへ通じる道も閉ざされるため食料の貯蓄が重要になるが、冬越しの準備の仕方をラガルドに教えたのは地元の人と先輩教師たちであった。一九一七年の秋にラガルドは一つ年長の教師ブロンに冬を越すためのジャガイモを一〇〇キロ注文している。彼女が住む小集落のジャガイモが周辺で一番美味しいと聞いていたようだ。また、フルスで一般的に食されていた「小麦粉のスープ」、「ラヴィオリ」は初めて口にするものだった。

同じ県内でも、ラガルドの故郷のケール村とフルス村とは生活習慣も気候もまるで異なっていたようで、実家からもってきた梨の木がうまく育たないと残念がっている。

宗教、信仰に関する言及は、両親への手紙にはあまり見られない。ミサの日はフルスの女性教師たちがバイヤスに集まるので六名を自宅にも招く予定という報告<sup>26</sup>と、寒さのせいでサン・ローランの教会の聖母マリア像がドレスを七、八枚も着ているという驚きの感想が述べられる程度だ<sup>27</sup>。彼女の両親が信心深い人たちではなかったことが一因だが、のちに哲学者のジャン・ギトンがラガルドを無神論者から「改宗したダビデ」とみなしたことからして、一九一七年の着任当初のラガルドは信仰心が強かったわけではなさそうである。他方で、一九一九年、一九二〇年にラガルドが友人のアンジェルに宛てた手紙は、神へのおもいで埋められている。アンジェルは、ラガルドの故郷ケール村で公共要理を教えていた女性であったため、話題が宗教に集中しているのかもしれないが、一九一九年のラガルドは毎週聖体拝領が受けられるフルスでの宗教生活に満足していて、夏のノートル・ダム・デュ・ローの巡礼にも参加したと語っている<sup>28</sup>。大自然に包まれ、シルヴたちとともに過ごしたフルスでの二年間が彼女を変えた可能性は大いにある。ダビデの多くはマリ・シルヴと同じく、カトリックの家庭に育ち、共和国の師範学校で信仰の「危機」を経験し、再び信心に戻るというルートをたどったと考えられるが、ラガルドのように友情を通じてカトリックへ改心したダビデも存在したことは注目に値する。孤立した若い女性が生活をともにする同業の友人たちに惹かれていくのはごく自然のことだったのだろう。

ダビデの絆の基礎にこのようなユベイ谷での友情があったことは確実である。残された史料の関係上、ここではシルヴより四歳年下のラガルド世代を中心に紹介したが、一九一六年にノートル・ダム・デュ・ローに集った六名もほぼ同じような関係を一九一四年頃から築いていたと考えられる。

① Jean Guilton, *Les Davideés*, p. 55.

② \* Eclaircissements sur les Davideés. Après le rapport de M.

Marceau Pivert au Congrès de Clermont \*, *Aux Davideés*, juillet 1930, p. 603.

- ③ Archives départementales des Alpes-de-Haute-Provence, 1T303
- ④ Archives départementales des Alpes-de-Haute-Provence. Les recensements de la population, 1896, 1901, 1906, 1911 (consultés en ligne). 国勢調査はインターネット上で閲覧可能。
- ⑤ Emmanuel Mounier. *Entretiens 1926-1944*. Rennes. Presses universitaires de Rennes, 2017, p. 114
- ⑥ Fernand Boulard. *Premiers itinéraires en sociologie religieuse*. Paris. Les éditions ouvrières, 1954.
- ⑦ \* Des Alpes au Mexique, l'émigration des Barcelonnettes \*. David Colon (dir). *Histoire*, 2<sup>e</sup>. Programme 2010. Paris. Belin, p. 22-23. ナンキョウの移民の経路について、フランスから北米向けの教科書に掲載されている。
- ⑧ Archives départementales des Alpes de Haute Provence, 1 T 104. Recueils des actes administratifs de la préfecture des Basses-Alpes. Élection des membres du Conseil d'administration de l'Office départementale des Pupilles de la Nation. Élection du 10 mars 1918. Collège électoral des instituteurs, collège électoral des institutrices.
- ⑨ Emmanuel Mounier. *Entretiens*, p. 101.
- ⑩ Emmanuel Mounier. *Entretiens*, p. 105.
- ⑪ Jean Guilton. *Les Dardides*, p. 46-48.
- ⑫ Lettre de Marthe Lagarde à ses parents, Saint-Laurent, 23 novembre 1917.
- ⑬ 一八八六年一〇月三〇日発布の通称「ユブレ法」の第六条には、「男子校では男性教師が教育を担当し、女子校・幼稚園・幼児学校・幼児学級・共学校では女性教師が教育を担当する。校長の妻や姉妹もしくは直系家族であれば女性であっても男子校で補助的に教育に従事できる。また、県議会は臨時の決定（常に取り消し可能）で、一男子教師による共学校の運営（裁縫を担当する女性教師を補助として）<sup>11</sup>、本条文の第二文の制限に対し特例を認めることが可能」とある。引用文中の「」表記は筆者前田の補足説明である。また、〈〉表記は原文において括弧で表された文や言葉を示している。(……) は前田による中略である。以下、同様。
- ⑭ Jean Guilton. *Les Dardides*, p. 47.
- ⑮ Jean Guilton. *Les Dardides*, p. 51-52.
- ⑯ ナンキョウの小説『タンデ・コロ』には現在のモデルがいたらしい。彼女が記したメモ書に基づいてナンキョウは小説を書いた (Emmanuel Mounier. *Entretiens*, p. 146)。
- ⑰ Emmanuel Mounier. *Entretiens*, p. 100.
- ⑱ フレート・ラガルドの兄ギブレット・ラガルドの孫にあたるジャン・マルコム (ジャンヌク在住) が手紙のコピーを提供してくれた。
- ⑲ Loëtitia. \* Souvenirs de Jeunesse \*. *Actes Dardides*, décembre 1926.
- ⑳ Archives départementales des Alpes-de-Haute-Provence, 6M101. Le recensement de la population, 1921. Fours (consulté en ligne).
- ㉑ Archives départementales des Alpes-de-Haute-Provence, 1T303.
- ㉒ Lettre de Marthe Lagarde à ses parents, Bayasse, 12 octobre 1917.
- ㉓ Lettre de Marthe Lagarde à ses parents, Bayasse, 27 octobre 1917.
- ㉔ Lettre de Marthe Lagarde à ses parents, Bayasse, 12 octobre 1917.
- ㉕ Lettre de Marthe Lagarde à ses parents, Fours, 7 novembre 1917.
- ㉖ Lettre de Marthe Lagarde à ses parents, sl., 4 octobre 1917.
- ㉗ Lettre de Marthe Lagarde à Angele, Fours, 14 octobre 1919.

## 第二章 共和国の教師として——ユベイ谷での経験——

### 文明化の担い手

ラガルドがフルス村バイヤス校で受け持った生徒数は非常に少なかった。一九一七年一〇月一二日の手紙では、新学期始めということもあり人数はとりわけ少なく「午前中に一人、午後二人」。七日後の一〇月一九日には多いときで「生徒は五人」と書いている。一九二六年の『オー・ダビデ』には当時のことを、「生徒たちは、点在している周りの小集落から通っていた。勇敢な子どもたち！冬には雪道を転がりながら、指を真つ赤にし、服をぐっしょり濡らしてやってきた。(……) 哀れな子どもたち！(……) 全員、ほとんど全員が〈科学〉をまったく受け入れなかった。彼らが暮らしている環境は彼らの知性を開くのにまったく役に立たなかった。全員が隣のイタリア語に近い方言で〈考えていた〉。私にはそのまま話すか、あるいは不完全ながらも訳しながら話した」と描写する。また、両親宛の手紙にも、新しい生徒がやってきたので名前を聞いたところ、生徒は少し間を置いた後、Ou salou pasと言った、ここの子どもたちはフランス語を一度も聞いたことがないと記している。Ou salou pasとは、プロヴァンス語で「わからない」という意味である。

この描写から、一九一七年においてもなお、この地域の人びとはフランス語を日常的には話しておらず、子どもにとつては学校がフランス語に触れる最初の間であったこと、また共和国の小学校教師としてのラガルドの自覚も伝わる。子どもたちの知性を開花させ、科学を伝えることを使命と考える教師の姿である。生徒たちは、「個人的に共和国を知っていた。共和国というあだ名の老女が近くにいたからである。四歳も一四歳もフランス共和国の恩恵は彼女のものとみなしていた」との一文もある。この女性がどうして共和国と呼ばれたかは不明であるが、この文面からは真の共和国を知ってほしいというラガルドの思いが読み取れよう。

ラガルドは、地元の住民たちを「原住民 indigènes」と呼んだ<sup>③</sup>。植民地帝国を築いていた当時のフランスにおいて、一般に植民地の「原住民」を指すこの単語がアルプスの奥地の女性教師によって用いられることは着目に値する。フランスの地方が植民地と同様に捉えられ、これを文明化するのが教師の仕事だと師範学校で教えられていた可能性は高い。同じ県内に住む家族に向けて、ラガルドは手紙をもっと書いて欲しいと切望し、「私は文明化された土地からくる、ちょっとした手紙をもらうのがとても好きなの」とも述べている<sup>④</sup>。

フルス村の住人については、「善良な人びと、もしかしたら少しばかり粗野。でも、善良で感じの良いキリスト教徒」と表現し、生徒のことで家を訪問すると、彼女はコーヒーとバター塗られたパンや、ラヴィオリとかマカロンと呼ばれたパスタを振る舞われた。ラガルドによれば、「衛生は完全に無視されていた」。足湯の実践を生徒に勧めたところ親は心配し、激しく反対。また「窓を開けるのは風変わり」とみなされた。フルスでは「病人は寝床を離れて家畜小屋の隅で養生する」と驚いている<sup>⑤</sup>。これらの習慣を変えていくことも教師の務めだとも考えていたようである。

#### ライシテの学校と信仰

さて、ライシテをめぐる事件が起きたのもフルス村のことだった。一九一八年二月の学校視察でマリ・シルヴは視学官から学校の中立性に違反したとして叱責を受けた。シルヴはその経緯をカトリック系の日刊紙『ラ・クロワ』の編集長ジャン・ギローに手紙で伝え、対応について助言を求めた。それらの手紙を読むと、一方でフリーメイソンの視学官は敬虔なカトリック教師の存在そのものを嫌悪し、他方でシルヴの側は神の存在を抜きに道徳を教えることができないと考えていたことがわかるが、ライシテをめぐる具体的な争点としては次の二つがあった。

第一の問題は、一八八二年のフェリー法で公立の初等教育は世俗のものと規定され、一八八三年にはカリキュラムから「道徳・宗教」教育が消え、「道徳・公民」教育が新たに導入されるが、一八八二年に発表された小学校の道徳教育の学

習指導要領に、「両親への義務」「祖国への義務」「他者への義務」「自分自身への義務」などと並んで「神への義務」という学習項目が存在していたことに起因した。<sup>⑥</sup>これは一九二三年まで残された。当時の公教育大臣ジュール・フェリーは「私たちの政治はフランス国民のようである。それは反教権主義的だが反宗教的ではない」と述べ、「神への義務」を教えることに同意していた。<sup>⑦</sup>

これを論拠としながらマリ・シルヴは、「私は確かに神の観念を教えていました。しかし、教室で私のカトリシズムを教えていたわけではありません」と述べることになる。<sup>⑧</sup>加えて、彼女はこうも言う。「それでも、私たちは数ヶ月前から迫害を受けていたので、今年度は慎重を期し、神に基づく道徳「の授業」を行っていません」<sup>⑨</sup>。ダビデの活動はすでに県内で噂になり視学官が監視を強めていたのを、彼女は知っていたのだ。<sup>⑩</sup>しかし、一九一八年二月に訪問した初等視学官は授業を視察しただけでなく、生徒に前年の道徳の授業のノートを家まで取りに行かせ、神に関する記述を発見する。後日送付された評価書に対しシルヴが抗議をすると、「神への義務は敵陣営に配慮して残されたにすぎず、師範学校教育からはずでこの項目は削除された。それに、師範学校出身の女性教師が神への義務を教えようとするなどということは想定されていない。まもなくこの文言は削除されるだろう」と視学官は応答したという。<sup>⑪</sup>シルヴは最終的にジャン・ギローの助言に従い、視学官の評価書に抗議の言葉を並べ、その上で署名した。<sup>⑫</sup>シルヴをギローに紹介したのはノートル・ダム・デュ・ローの司祭リカールである。

第二の争点は、信教の自由についてであった。シルヴは手紙の中で、自分に起こった出来事に続いてヴィラール・ダバス小集落のブロンンの例を挙げながら、彼女は神の観念を教室にはまったく持ち込んでいないのに、雑誌『オー・ダビデ』を受け取っているというだけで、つまりカトリック信者だというだけで、視学官に目を付けられ叱責を受けたと憤る。そして「信教の自由はどこにあるのか」と問い、「私たちはフランスのために、私たちの生徒たちのために闘っています。私たちは誤謬の中で、隷属状態の中で生きていたくはないのです」<sup>⑬</sup>と語気を強めた。

一方でシルヴはギローに、視学官との付き合い方を教えてほしい、未熟な自分たちを導いてほしいと相談している。視学官に激しく憤りながらも、必要なときには行政と妥協しようという姿勢が彼女に見られることも忘れてはならない。

それから一〇年ほど後の一九二九年、シルヴの学校（このときはセーヌ村）を訪問したエマニュエル・ムニエは彼女の教室での様子を次のように記した。「私が滞在していた間、二つのことが起こりました。「一つは」一人の子どもが彼女に〈奇跡〉について質問をしたのです。その子は朝、新聞に奇跡について書かれているのを見たようでした。彼女は、教室ではこういう問題について話してはならないのだと優しく諭しながら、子どもに回答するのを拒みました。「もう一つは」子どもたちが、ジャン「おそらくジャン・ギトンのこと」に宛てる手紙に、司祭が病気の間、自分たちへ公共要理を教えにくれたお札を書いてもよいかと彼女に尋ねました。へいいですか、みなさん、絶対にだめですよ。ここではだめです。授業には関係のないことですから」<sup>⑭</sup>。視学官と対決した一九一八年から比べると、シルヴ自身、学校の宗教的中立性により敏感になり学校の内と外との世界を厳格に分けようとしている印象を受ける。

またシルヴは、地元の司祭に対して一定の距離をとり続けた。ダビデは、特定の指導司祭を持つことは一度もなかったが、それはライシテの学校の教師という自分たちの独立性を確保するためだった。フランス司教団は一九二五年三月に、公立校は「子どもの知性を欺き、意志を損ない、良心をゆがめる」と公言してはばからず、ピウス一世は一九二九年一月三十一日発布の回勅「若者の教育」でカトリックの生徒はカトリックの学校で教育を受けるのが好ましい、との見解を示していた<sup>⑮</sup>。フランスのカトリック教会がライシテの学校を公式に容認するのは一九四五年でしかない。シルヴは、告解の際に司祭から教室で祈るようにと要求されたこともあったが、それを拒絶し続けた。司祭は「私たちの問題をまったくわかっていない」とシルヴは笑みを浮かべて語った、とムニエは述懐する<sup>⑰</sup>。また、ダビデの初期の活動を支えたシニョレ司祭に関しても、「彼はおそらくライシテの学校に対する私たちの忠誠義務、中立性の義務をほとんど理解していなかったでしょう。その点について私たちは彼に抵抗をしました」と回想した<sup>⑱</sup>。

シルヴは、一方では視学官から「毎日ミサにいくあなたには公立の職はない」と警告され、他方では司祭から「私立学校へ移りなさい」と忠告されたと述べながら、それでも公立校にこだわった理由をこう表現した。「私の居場所は世俗の学校にあります。私は世俗主義者以上の者になりたい、つまりライシテの本質に到達したいからです。同時に私はカトリック以上の者にもなりたいからです。そう敢えて言います」<sup>⑩</sup>。

教師の権利である信教の自由を守るライシテ。彼女にとってはそれがライシテの本質の一つであったのである。ダビデの最年長メンバーだったメラニ・ティヴォルの発言にもその点ははっきりと読み取れる。「私たちの権利に関して頑固でありましょう。私生活において私たちは自由でありたいと願います」<sup>⑪</sup>。

- ① Loëtita, « Souvenirs de Jeunesse », *Aux Davidés*, décembre 1926.
- ② Lettre de Marthe Lagarde à ses parents, Fours, 7 novembre 1917.
- ③ Loëtita, « Souvenirs de Jeunesse », *Aux Davidés*, décembre 1926.
- ④ Lettre de Marthe Lagarde à ses parents, Bayasse, 12 octobre 1917.
- ⑤ Loëtita, « Souvenirs de Jeunesse », *Aux Davidés*, décembre 1926.
- ⑥ 「神への義務」については、前田更子「一九世紀末のフランスにおける女子師範学校の世俗化と宗教」『明治大学人文科学研究所紀要』第八七冊、二〇一〇年三月、一四一―一四三頁。
- ⑦ Patrick Cabanel, *Entre religions et laïcité. La voie française : XIX<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècles*, Toulouse, Privat, 2007, p. 177.
- ⑧ Archives nationales, 362AP / 175, Papiers Guiraud. Lettre de Marie Silve à Jean Guiraud, 6 mars 1918.
- ⑨ Archives nationales, 362AP / 175, Papiers Guiraud. Lettre de Marie Silve à Jean Guiraud, 18 février 1918.
- ⑩ Archives nationales, 362AP / 175, Papiers Guiraud. Lettre de l'abbé Ricard à Jean Guiraud, 17 novembre 1917.
- ⑪ Archives nationales, 362AP / 175, Papiers Guiraud. Lettre de Marie Silve à Jean Guiraud, 16 mars 1918.
- ⑫ Emmanuel Mounier, *Entretiens*, p. 101-102.
- ⑬ Archives nationales, 362AP / 175, Papiers Guiraud. Lettre de Marie Silve à Jean Guiraud, 9 mars 1918.
- ⑭ Emmanuel Mounier, *Entretiens*, p. 108.
- ⑮ Antoine Prost, *Histoire générale de l'enseignement et de l'éducation en France*, tome IV, *L'École et la Famille dans une société en mutation*, Paris, Nouvelle librairie de France, 1981, p. 422.
- ⑯ Bruno Poucet, *L'enseignement privé en France*, Paris, PUF, Que sais-je ?, 2012, p. 28.
- ⑰ Emmanuel Mounier, *Entretiens*, p. 108.

<sup>18</sup> Archives de l'Évêché de Digne. Lettre de Mlle Silve, à l'occasion

du jubilé de M. le chanoine Signoret André, 20 mai 1959.

<sup>19</sup> Jean Guiron, *Marie Silve et la spiritualité laïque*, Toulouse.

Éditions du foyer de commingues, 1978, p. 12.

<sup>20</sup> R. C. L., *Mlle Thivolle. La « Grande Amie » des Dardaïles*

(1864-1918), Aix. Imprimerie des Croix Provençales, 1926, p. 16.

### 第三章 ダビデ・グループの特徴

#### 雑誌の目的と内容、購読者との交流

この山奥の、友情で結ばれた小さなグループが、どのようにして全国的な運動へと展開していくのだろうか。シルヴたちは山の孤立した生活からはおおよそ考えつかないほど広い交友関係を築き上げていく。

雑誌『オー・ダビデ』の刊行は一九一六年一月に始まった。最初の号の購読者はわずか一二名であったが、一九一七年九月のノートル・ダム・デュ・ローの黙想会には三〇名以上が集まり、一九一八年秋の雑誌購読者数は三〇〇名に、一九二五年には二五〇〇名までに増加した。<sup>2</sup> ダビデは規則を持つ団体ではなく、雑誌購読者とその支援者の緩やかな集まりであるため、賛同者の正確な人数を把握することはできない。しかし一九二六年と一九三〇発行の対立陣営の新聞によれば八〇〇名<sup>3</sup>、一九二七年の警察の報告書には一万五〇〇〇名とある。<sup>4</sup> 一方、マリ・シルヴ自身は、一九三一年一月に雑誌予約購読者数は四〇〇〇名、そのほかに二〇〇〇〜三〇〇〇名の賛同者がいると記す。<sup>5</sup> 公立小学校の女性教師数は一九二六年度に七万六二二二名、一九三〇年度に八万三三三二二名であるから、警察とシルヴの数字には開きがあるもの、大雑把に捉えて公立女性教師の五パーセントから一〇パーセント程度がダビデに賛同していた可能性があるということになる。一九二八年に南仏ヴァール県のドラギニャン女子師範学校を卒業した二三名のうち一五名はダビデだとも言われた。<sup>7</sup> ダビデが女性教師の間で一定の影響力を持っていたのは間違いないさそうだ。

とはいえ、公立小学校で教鞭を執るカトリックの女性全員がダビデに賛同していたわけではもちろんなかった。<sup>⑧</sup> また、ダビデに賛同していたとしてもその事実を周囲に隠している人も少なからずいた。「私にグループは不要です」「独立と静寂を保ちたい」のでダビデには参加しない、あるいは「反教権的な周囲の人びとの目が気になりダビデになれない」という意見が、雑誌『オー・ダビデ』に掲載されている。<sup>⑨</sup> こうした意見に対しダビデは誌面を使って、「周囲には知られないように郵送することが可能」「同僚を怖がることはない」などと答える。実際、ダビデであることを隠したい読者に向け、編集部は年間五フラン高い購読料をとり、雑誌を封筒に入れて送っていた（通常は帯封）。

月刊誌『オー・ダビデ』は、A五版程度の大きさで、ページ数は一九二〇年代には一号につき約四〇〜五〇ページ、一九三〇年代には約六〇ページであった。内容は、大きく二つに分けられる。雑誌の前半三分の二程度には、歴史、思想、哲学、社会問題、宗教文化、霊性・精神生活を主題とする学術的な論文やエッセーが並ぶ。マリ・シルヴを中心とする編集部は、カトリック女性教師の教養と知性、そして信仰心を高めるためにダビデ活動の一つの使命としており、これらはそのために用意された論考だった。寄稿者の中には男性の知識人もいた。

他方で、後半の三分の一はより直接的に女性教師の日常・職業に関する内容で占められ、エマニュエル・ムニエは、「読者のほとんどはこの頁から読むだろう、そこに彼女たちの生活・友情・秘密を見いだす」と観察する。<sup>⑩</sup> 教師の日常的取り組み、教育実践の紹介・提案、読者からの手紙の抜粋、編集部からの返答、文献案内、黙想会・会合の情報、各種組合・アンシエーションの情報が掲載されていた。こちらのパートの執筆者は公立小学校の女性教師である。

雑誌の目的は、ダビデ結成の理念である「互いに助け合い、女性教師としての義務をよりよく果たし、私たちの宗教をよりよく知ること」に沿い、同じ悩みを抱える孤立したカトリックの公立女性教師が連帯する場をつくり、各人の職業と信仰との十分な両立を支えることに置かれた。「私たちの雑誌は修道や神学の雑誌ではない。それは（恐れずに、非難されずに）私たちの職業上の義務とカトリックの義務を両立させる手助けをする同業者の雑誌である」<sup>⑪</sup>と説明される。

信仰と職業を同じくする女性が編集する『オー・ダビデ』は、とりわけ新米の女性教師にとつては生活上、職業上の助言者であった。<sup>⑫</sup>「孤独を安らげてもらえる」、「信仰の悩みを共有できる」、「助言がもらえる」といった読者からの感謝の言葉はほぼ毎号に掲載されている。また、ダビデには「図書館」制度があり、希望者には本の貸し出しを郵送で行っていた。

さらにダビデたちには対面での交流の機会もあった。一九二四年の夏を例にとると、ノートル・ダム・デユ・ローのほかにパレ・ル・モニアル、ルルドといったカトリックの聖地で黙想会が開かれ、リール、ニース、マルセイユでも集会がもたれた。<sup>⑬</sup>巡礼は定期的企画され、一九二四年にはローマ訪問も実現させた。そのほか一九三三年にはパリに住居を借りて拠点を設けると同時に、サリエージュ大司教<sup>⑭</sup>から援助を受けてトゥールーズ近郊に「菩提樹の家」と称する別荘地を購入入さえている。

#### 女性の主体性

ダビデには、サリエージュ大司教だけでなく、ジャン・ギトン、エマニユエル・ムニエをはじめとするカトリック知識人の支援者が多くいた。しかしシルヴにとつて重要だったのは、自分たち女性小学校教師が主体性・独立性を保って活動することだった。マリ・シルヴがジャン・ギトンへ宛てた手紙を読んでみよう。

「この場をお借りしてお願いしたいのは、私たちを喜ばせるのを第一の目的あるいは唯一の目的として何かをすることはやめてください。私たちのグループへのあなたの〈永遠の愛情 *attachement perpétuel*〉——私はこの形容句を忘れません——は十分に大きく、神の力によるものでしょうから——私はそう願います——、あなたは私たちの中に何よりも魂の宝を認め、疑義や批判を含めご自身の考えを述べることができるはずで、私たちは、慰めよりも援助と真実が必要なのです」<sup>⑮</sup>。

この手紙は、二人の関係の初期に、つまり一九二六年夏のノートル・ダム・デュー・ローの黙想会でギトンと出会ってから二ヶ月ほどのちに書かれたものである。「慰めよりも援助と真実が必要だ」という言葉から、単なる精神的な励ましではなく、具体的な支援、確実な知識を得たいというシルヴの意思が感じられるし、彼女の強い自立心がうかがえる。また、相手が大物の大学人、聖職者、視学官であろうと、物怖じせず自らの意見を述べ、批判するシルヴの能力。これには驚くべきものがある。アルプスの寒村の一小学校教師が一目置かれる存在であり続けたのはこの力ゆえであつただろう。

上の手紙が書かれたほぼ同時期には、数学者で哲学者のマルセル・レゴアの女性への、そしてダビデへの偏見に対し諦めにも似た率直な感想も綴られている。レゴアの態度は「高慢だと感じます。彼はあらゆる修道会や新旧の社会がそうするのと同様に、(……)少数の、同じ型にはめ込まれた規律正しい純然たるエリートを養成するために行動したいのです。彼らは人数が多いのに緊密な結びつきを保つダビデについて、私にこう言いました。女性は人の言うことに従順に従いがちですよ、と。私は彼がまだ理解できないことを、私たちは修道会とは逆向きに行動していることを説明しませんでした」。

後述するが、ダビデは男女の差異や女性の特性を明確に意識しており、その点では当時の支配的なジェンダー観を受け入れた運動だったと言える。しかし従順な女性という固定観念への反発にあるとおり、女性を従属した存在と捉える女性観はダビデとって許容できるものではなかった。ダビデたちは活動を展開する中で男性、それも権威ある知識人の支援と協力を頼っていたが、それはあくまでも女性の自律性と主体性が守られる範囲内においてであった。

シルヴはダビデの特徴を次のように表現する。「私たちの扉は大きく開かれています。私たちはガラスの家において、中をすべて見せようとしています。作り物は一切なく、規則もありません。私たちはひとり一人の友を、彼女の正確な義務を、彼女の傾向を、彼女の才能を、彼女の環境を理解しようと努め、誰にも似るべきではないその彼女が完全に自己実現をできるように助け、置かれた場所で宗教生活を可能な限り深く生きられるように助けます。(……)困難なこと、それ

は他者をよく理解するためには、常に自らを脱しなければならぬということなのです」。またほかの日には、こうも言う。「未熟な活動に違いない私たちの活動は、いつでも再編可能な管理者としっかりとした一つの組織を持たねばなりません、いわば（その下には）、肩書きもヒエラルヒーもなく、見た目には規律さえなく、一方では全面的な献身によって、他方では相互の愛情と自発的な信頼、そして常にすべてを（差し出す）助けとなる、神の力による友情によって動かされています」<sup>16</sup>。

シルヴはダビデのリーダーだと外部からも内部からも認知されていたが、ほかのメンバーと同じ一人であるという姿勢を徹底して貫こうとしていた。ヒエラルヒーのないフラットな人間関係、修道会のような会則もなく閉ざされず、誰にも開かれている集団。だからこそ、ダビデたちは互いを尊重し信頼し、他者のために自らを投げ出す必要性をも説くのである。友情は受け取るだけでなく与えなければならない。一九二五年一月号の記事「ダビデを突き詰める」でも、読者に対し雑誌を定期購読しているだけではダビデになつていないと積極的な参加を呼びかけている。<sup>17</sup>

- ① « Notice historique sur le bulletin : Aux Davidées », *Aux Davidées*, octobre 1918.
- ② Jean Guillon, *Les Davidées*, p. 58. マリ・シルヴの回想には、「定期購読者数は「一九二五年に二五〇〇強」とあるが、エマニュエル・ムニエは「一九二一年に四〇〇〇名を超した」と記載している (Emmanuel Mounier, *Entretiens*, p. 113)。
- ③ *Journal des instituteurs*, 12 décembre 1926 : *L'école libératrice*, 28 juin 1930.
- ④ Archives nationales, 20040106 / 20 Direction de la sûreté générale, Contrôle général des services de police administrative.
- ⑤ *Les Davidées* \*, 25 août 1927.
- ⑥ Archives municipales de Lyon, Fonds André Latreuil, 154 II 32.
- ⑦ *L'école libératrice*, 28 juin 1930.
- ⑧ *Aux Davidées*, juin 1926.
- ⑨ *Les Davidées*, février 1924 : avril 1924, p. 152.
- ⑩ François Chauvière (Emmanuel Mounier), « Les idées et les œuvres. Une amitié spirituelle : les Davidées », *La vie spirituelle. Ascétique et mystique*, 13<sup>e</sup> année, tome 27, avril-juin 1931, p. 78-79.

- ①① \* *Davidées jusqu'au bout* \*. *Aux Davidées*, novembre 1925, p. 324.  
①② *Aux Davidées*, janvier 1923, p. 38 ; mars 1924, p. 83.  
①③ *Aux Davidées*, juillet 1924.  
①④ サリエージュ大司教 (Jules-Geraud Salège, 一八七〇—一九五六) は、ナチス占領下のフランスで展開したユダヤ人迫害に対し、批判的態度を示したことで有名な聖職者である。アルプス地方ギャップの司教を一九二五年から一九二八年まで務めたことが縁でダビデを知り、  
①⑤ トウルーズへ移ってからダビデを支援し続けた。トウルーズ大司教在任期間一九二八—一九五六年。  
①⑥ *Lettre de Marie Silve à Jean Gutton*, 13 novembre 1926, dans Emmanuel Mounier, *Entretiens*, p. 111.  
①⑦ Emmanuel Mounier, *Entretiens*, p. 110-111.  
①⑧ \* *Davidées jusqu'au bout* \*. *Aux Davidées*, novembre 1925, p. 324.

#### 第四章 信仰と女性教師の使命

##### 小さな村にとどまるように

ダビデは出版ジャーナリズム、郵便、鉄道を利用してネットワークを拡大したのであり、その点では近代の特徴を備えた運動であった。だが他方で、ダビデの中心メンバーはあくまでもバス＝ザルプ県の生まれ故郷に近い、人口の少ない村にこだわり、とどまり続けた。マリ・シルヴは、ダビデと農村との関係を、都会との対比で次のように表現した。「都市に「も」ダビデはたくさんいます。しかし彼女たちの生活は職業上の義務とは関係のない、いろいろなことに時間をとられています。また集団の運営を、とくに雑誌の運営を手伝うにはあちこちに散らばりすぎてもいます。雑誌を支えているのは小さな村で暮らしている人たち、農村の穏やかさ、つつましさ、平和の中に望んで暮らしている人たちです。農村は神のそばで暮らし、神に魂を捧げることがよりたやすい場所なのです」<sup>①</sup>。農村は、信仰生活を送る上でかけがえのない場所だと認識されているのである。

しかし、実際の農村での生活には苦勞も伴う。だからこそダビデは「孤立した女性教師を一人にさせない」という基本

方針のもとに、とりわけ農村に勤務する女性教師に宛ててメッセージを発信した。ひとり一人の日々の苦労に対する理解と深い共感が示され、それと同時に神が定めた運命に従い、与えられた場所にとどまるよう助言を与えるのである。たとえば日々の不平不満を述べる一人のダビデへの応答という形で書かれた「女性教師の喜び」というコラムは次のように結ばれる。

「妹よ、あなたはもしかしてそれでもまだ自分の運命に満足できないでしょうか。〈この家は悲惨な状態なのです〉とあなたは言います。では、天の王がお生まれになった洞窟とそこを比較できますか。あなたは幸運でしょう。〈とくに無関心、冷淡さ、手荒い待遇、軽蔑があるのです〉」とあなたは言います。神はほめたたえられます！ 完璧です。あなたの幸せに足りないものは何もありません。なぜならば、人が自らの内に生きたイエスの精神を持つのであれば、〈貧しい人たちは幸いである。苦しんでいる人たちは幸いである。迫害された人たちは幸いである。悪口を言われる人たちは幸いである。軽蔑される人たちは幸いである〉からです。(……) いちばん小さく、いちばん後の者であるダビデよ、あなたは、敬意を払うべき功績のある〈模範的な〉親愛なる女性教師よりもずっと羨望に値するのです。そうです！ 第一の者になろうと望みながら、イエスが望む限りいちばん後の者にとどまってい下さい<sup>②</sup>。この表現は、偉大な者とは何かについて説く聖書の中のイエスの言葉、「第一の者になろうと望む者は、いちばん後の者となり、またみなに仕える者とならなければならない」(マルコによる福音書九章三五節)<sup>③</sup>に基づくものと思われる。

記事は、「親愛なる友へ」「親愛なるダビデたちへ」で始まる手紙形式や応答文で書かれることが多く、これは読者との親近感、一体感を生むための編集部の工夫であっただろう。

四月の異動願いを出す時期には、年若い両親に近づくために異動を希望するのは望ましいとしながらも、数年ごとに学校を移る行為を戒めている。一つの村で子どもたちの成長を見守り、その生徒が親になるのを見届け、彼らの子ども世代にも教育を施すことで得られる喜び、小さな村の学校に長くにとどまることの幸せが説かれる。

教師は地元の人びとと交流し、その中に入っていかなければならない。女性教師は、アルコール依存症に苦しむ村においては助言者として改善の手助けをし、<sup>④</sup> 医者のない村では衛生、薬学、看護の知識を活かして村人を看病し、過疎化の危険にさらされた村では生徒だけでなく村人へ農村生活のすばらしさを科学的に伝え、さらに行政と彼らと結びつける努力をするようにとも忠告された。<sup>⑤</sup> このようにダビデは、人口の少ない村での勤務を信仰面からも職業面からも評価し、同僚に推奨したのである。

また、当時のフランスでは法に従い、小村の教師はきままって女性であった点にも改めて注意を払おう。これは幼い子どもとの面倒をみるのは女性の仕事であるという当時支配的だったジェンダー観に基づく決定であり、そこに構造上の男女差別があったのは確かである。しかし一方で男性教師が不在であったがゆえに、女性教師は村でほぼ唯一、知性と科学を体現する存在で、威信や影響力を持ち得たことも事実である。実は、女性教師の社会的地位を考える上では、小学校教師は公務員の中でもっとも早く一九一九年に給与の男女平等を実現していたということも重要である。<sup>⑥</sup>

#### 信仰に基づく女性観、家族観

ではダビデたちは女性である自分たちの役割をどのように認識し、また家族についてどのような考えを持っていたのだろうか。彼女たちの思想と行動の根底にはまずもって当時のカトリックの教えと規範があった。キリスト教に基づく規範となれば、フランスの共和主義・世俗主義の対極に位置するように思われるかもしれないが、実はそうではない。家族主義や男女の不平等を温存するジェンダー規範に関して、共和主義とカトリック教会がその意見を二〇世紀後半まで一致させていたことは近年の研究がとくに指摘するところである。<sup>⑦</sup> その点からすると、ダビデはキリスト教徒としてだけでなく、共和国の市民としても模範的な働きをしたことになるのだろうか。詳しく見ていこう。

マリ・シルヴはギトンとムニエのインタビュアーに次のように応じる。「私は自分に対しても神に対しても自信がほとん

どありませんでした。ある司祭が信頼は愛の大きさであると示してくださり、気分が落ち着きました。行動すればするほど自信は高まりましたが、私において自信は生来のものではありません。私たち、もう一方「の性」である女性たち。私たちは苦しむために、同情するためにつくられています。まさにそのことは私たちの肉体に刻まれています。しかしだからといって、私たちが働くのを妨げられてはならないのです<sup>⑧</sup>。自信がないと述べるシルヴ。それが女性であるためとまでは明言されていないが、次の文は「女性は苦しむために、同情するためにつくられた」と続いており、女性性に由来する自信のなさを告白しているようにも読める。

では、シルヴにとって女性教師の資質は何か。知識、自己犠牲の精神などは当然であるが、それに加えて教師の女性性に関して言えば、ダビデ・ピロのように生徒を「母性愛」でもって愛し、それを言葉で伝え行動で示すことだと語られる<sup>⑨</sup>。つまり、独身であろうと彼女は明らかに母性主義を称揚する立場にあった。

ただし、彼女の理想は家庭内にとどまる母ではなく、働く母である。先の引用文の最後、「しかしだからといって、私たちが働くのを妨げられてはならないのです」という言葉は、教師としての自負であり経験に基づいた訴えである。ダビデたちは、男性と女性は異なる存在であるという認識を基本としながらも、先に見たとおり女性の従属性については批判的で、女性の労働と自立を非常に重視していたことがここでも確認できる。

ダビデは共和国の教師として、カトリックの教師として、自分たちが家族政策にも関わるべきだと主張した。第一次世界大戦によりフランスは一三〇万人の男性を失ったが、この数は男性就業人口の一〇パーセント、総人口の三パーセント強にあたった。減少した人口を回復するため、戦後のフランスでは出産を奨励する動きが加速化し、それまで少数派だった出産奨励主義運動、家族中心主義運動が力を持った。結婚・出産は女性にとつての半ば義務となり、一九二〇年の法と一九二三年の法は避妊についての知識を広めることを禁止し、中絶を犯罪行為とした<sup>⑩</sup>。こうした文脈の中で『オー・ダビデ』でも人口減少対策がダビデの「布教」活動の一環に掲げられ、編集部は「フランス人口増加全国連合」に加入したこ

とを読者に告げている<sup>⑪</sup>。また、人口増加のために教師として成すべきことが列挙され、たとえば生徒に妹か弟が出来た場合には授業中に盛大に祝い、一人っ子を憂えるようにとか、子どもがいる家庭に共感を示し必要であればその家庭の手助けをなささいとか、国が子どもがいる家庭に負っている感謝の念を教師が表明するようにとか、さらには育児に関する授業を行うように、と助言された。そして文章はこう続く。「おわかりでしょう、独身者であつてさえもフランス再建の事業に関心を寄せる方法はたくさんあるのです」。一方、若いダビデに向けては、「将来家庭を築く幸せを持つ女性教師たちは、より多く、そしてよりよく」この事業に参加できるようにと言ひ、「神がその数を増やしますように！」と、論者は結ばれる<sup>⑫</sup>。

神が自分を公立学校教師に導いたからにはフランスにも尽くさねばならない、この姿勢はダビデに一貫している。その意味では彼女たちは愛国主義者であつた。「生徒の面倒をみることは私たちの国家への義務、つまり私たちの様々な義務の中でもっとも重要なことです。それは国家への義務を列聖することでありませう<sup>⑬</sup>」と言ひ切つてゐる。彼女たちにとつて共和国の教師としての義務と自分の信仰は完全に共存可能であり、相互補完的でさえあつた。信仰があるゆゑに国家への義務を十全に果たすことができるというわけである。

### 独身であること

独身者であつてもフランス再建事業に関心を寄せる方法はあるのだという上記の主張は、ダビデの中心メンバーのほとんどが独身であつたことを考えると、読者へのメッセージとして特別な意味を持つ。

修道女が教師の理想とされた一九世紀には、フランスの大多数の女性教師は独身であつた。しかし、二〇世紀に理想の教師像が結婚し子どもを育てる共和国の母へ変化すると、結婚する教師の数は明らかに増加した。ノルマンディ地方のマシユ県の女性教員を例にとれば既婚者の割合は、一八九七年に一八・五パーセント、一九〇三年に二七・三パーセント、

一九二二年には五六パーセントへと変化した。結婚相手には男性教師が多く、行政も教師同士の結婚を積極的に推奨した。同じ村の男子校で夫が教え、女子校で妻が教える、あるいは幼い子どもの面倒をみるのが期待されたのである。ナポレオン法典の規定に従い当時、妻には夫と同居する義務があったため、国はこの問題に対し一九二一年にルスタン法を制定し、公務員夫婦の職住接近を定め、解決を図った。

こうした風潮の中、独身者は非難的となった。一九二六年四月号の『オー・ダビデ』にある「少し笑うために——またしてもダビデ」というコラムの書き出しはこうである。「相も変わらずこのダビデだ、この〈公立の女性教師〉。きわめて危険だ。彼女たちは〈信心に凝り固まり多かれ少なかれヒステリーで、精神異常か不安定〉と噂される」。なんてすばらしい定義なのか。もし、我々のグループに根拠なく贈られたこのちよつとした広告が神経症の専門家へ届いていたなら、学者の心を歓喜で飛び上がらせるに十分であつただろう。生理学者の気をそそる特異な事実、つまり雑誌のすべての定期購読者——数千人——が神経症もしくは精神障害の重症な症状を示しているのだから<sup>15</sup>。また、別の号には、ダビデのうわさに恐れおののく女性教師がコミカルに描かれるが、そこでのダビデは、「お高くとまつた女性」、「信心に凝り固まつた嫌な女」、「呪いをかける」、「食事もしないし、眠らない女」と表象される<sup>16</sup>。中世の魔女、一九世紀のヒステリー患者といった歴代の規範から逸脱する女性の表象が見事にダビデに投影されている。両大戦間期には、独身者がそのリストに加えられたと言えそうである。

ダビデの中心メンバーが独身であつた実際の理由はわからない。前世紀に見られた女性教師の慣習、神と教職に人生を捧げようとする信仰、経済的・精神的自立、自由を守りたいという考え、そして第一次世界大戦による同年齢の男性人口の不足という時代状況もあつただろう<sup>17</sup>。マリ・シルヴたちがノートル・ダム・デュ・ローで初めてティヴォルに出会つた際、ティヴォルは五二歳で生涯独身であり、そのことについて「暇がなかった」と語つた<sup>18</sup>。このときのやりとりを雑誌や追悼文でシルヴたちは何度か回想していることから、仕事に明け暮れるゆえに結婚の暇がないという説明は、戦争の影響

で男性が不足しているという事実と並んで、ダビデたちにとっては自己防衛の理屈、周囲からの批判を払いのける理由として好都合だったのかもしれない。

ただし注意すべきは、自分が独身だからといって、シルヴたちは独身をカトリック公立教師の同僚に、とくに若い同僚に容易に推奨している様子は見られない。『オー・ダビデ』には結婚に関する記事が何回か登場するが、それを読むとむしろ結婚は強く勧められる。結婚を断固として拒絶するという若い教師に向けて、こう述べられる。

「私はあなたを非難しません。「独身の」私自身、主の非難を恐れています。なぜならば主のために人間の愛の喜びを諦めるのは特権であるからです。しかし、あなたはまだとても若い。（……）私は、若い女性たちが自らの宗教熱の中で結婚について間違った考えを抱いていないか、結婚を実際よりも低く評価していないか、余計に完璧であろうとする——それは幻想であるかもしれないのですが——不安のせいで結婚から遠ざかっているのではないかと懸念します。（産めよ、増えよ）とはじまりに神は仰せられました。イエスは結婚を秘跡としました。キリスト教の結婚は非常に美しいものなのです。（……）結婚すること、それはとりわけ神に子どもを与えることです。結婚の典礼は、家族は神の祝福であることを、豊かであればなおさらいつそ家族の人数が増えることを理解させようとしています（詩編一二六編）。（……）大多数の人の使命とは結婚であり、そのほかの使命は稀なのです、つまりは企てる前にしっかりと研究されなければならぬということを感じていてください」<sup>⑧</sup>。

「そのほかの使命」とはつまり独身者の使命であるが、これが「特権」だと表現される。この文面は、若い人へ独身を選択する前に「特権」に付随する神への愛＝義務を自覚するようにと覚悟を求めているようにも読めるし、単純に結婚を推奨しているようにも読める。この記事が書かれたのは一九三二年で、シルヴは三八歳、ラガルドは三四歳、ダビデの中心メンバーはみな三〇歳代半ばで、独身であった。そのような彼女たちが年下の若い同僚に対しては、教職と結婚生活は両立可能だという見解を示しつつ、子どもを持つことの信仰上の意義を語り、既婚者にも神の国への貢献の仕方があるの

だと論ずるのである。その理由については想像することしかできないが、教師・市民としての責任感や愛国心、社会的圧力があつたのだろうか。いずれにせよここで語られた内容が本心からのものだとすると、彼女たちは結婚を半ば国民の義務とする共和国の価値規範を、信仰を根柢としながらも内面化していたということになるのだろうか。

- ① Lettre de Marie Sive à Jean Guiton, 5 octobre 1926, dans Emmanuel Mounier, *Entretiens*, p. 110.
- ② Une Heureuse, « Les joies de l'institutrice », *Aux Davidées*, janvier 1930, p. 243-246.
- ③ フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書』（原文校訂による口語訳）／サンパウロ、二〇一三年、新約聖書部分の一―一頁。
- ④ *Aux Davidées*, mars 1926, p. 127; janvier 1924, p. 37.
- ⑤ « Apostolat. L'abandon des campagnes », *Aux Davidées*, mai 1924, p. 190-192.
- ⑥ Antoine Prost, *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967*, Paris, Armand Colin, p. 381.
- ⑦ Florence Rochefort, « Ambivalences laïques et critiques féministes », Florence Rochefort (dir.), *Le pouvoir du genre. L'écrit et religions 1905-2005*, Toulouse, Presses universitaires du Mirail, 2007, p. 65-82; Joan W. Scott, *La religion de la laïcité*, Paris, Flammarion, 2018; 伊達聖伸「男性性の探究と#MeToo運動」『群像』二〇二〇年九月号「三五四―三六三頁」。
- ⑧ Emmanuel Mounier, *Entretiens*, p. 107.
- ⑨ Jean Guiton, *Les Davidées*, p. 53.
- ⑩ フランソワーズ・テギー「第一次世界大戦——性による分割の勝利」ショルジュ・デュビイ、ミッシェル・ペロー監修『女の歴史Ⅵ 二〇世紀Ⅰ』藤原書店、九〇―九四頁。
- ⑪ 出産奨励運動については、河合務『フランスの出産奨励運動と教育——「フランス人口増加連合」と人口言説の形成』日本評論社、二〇一五年に詳し。
- ⑫ *Aux Davidées*, avril 1924, p. 156.
- ⑬ « Notre retraite du Laus », *Aux Davidées*, avril 1924, p. 135.
- ⑭ Antoine Prost, *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967*, p. 382.
- ⑮ « Pour rire un peu. Encore les Davidées », *Aux Davidées*, avril 1926, p. 142-144.
- ⑯ « Garez-vous », *Aux Davidées*, février 1928, p. 109-112.
- ⑰ *Aux Davidées*, avril 1926, p. 167.
- ⑱ Jean Guiton, *Les Davidées*, p. 56.
- ⑲ *Aux Davidées*, décembre 1932, p. 179-180.

## おわりに

本稿は公教育のライシテ原則が制度化されていた両大戦間期のフランスで、カトリックの敬虔な信者であった公立女性

教師はどのように生きたのかという問いから出発して、ダビデの中心メンバーの体験、同じ立場の女性教師同士の結びつき、彼女たちの女性観、家族観を検討してきた。

そこで確認されたのはまず、両大戦間期のフランスにおいて公立小学校教師の一定数が熱心なカトリック信者であり、信仰および宗教的世界観に裏付けられた規範に沿って暮らしていたという状況である。小集落に派遣された若い女性教師たちは、物質的にも精神的にも疲弊し孤独にさいなまれ、信仰に基づく同業者の絆に救いを求めていた。世俗的家庭で育つたにもかかわらず、雪深い山岳地帯で自然の豊かさや脅威を知り、また同業者の深い友情を触れた結果、改心したマルト・ラガルドのような例もあった。カトリシズムは師範学校教育の機会を与えたフランス共和国と並んで、民衆層の女性たちに人のつながりを提供し、職業上の知識と自信を与え、雑誌を通じた自由な交流の空間をも用意した。こうした日常生活に支えられた共和国の女性教師たちもいたのである。

「黒衣の軽騎兵」の世俗的イメージからは遠いが、地元根付き、信仰に生きた彼女たちもまたライシテの学校を尊重しつつ、科学、衛生、言語教育などを通じてフランスの辺境を文明化する使命感に燃え、人口減少といった国家的政治課題に取り組む、共和国の愛国的な教師たちであった。先に見たとおり、宗教とナシヨナリズムはダビデの中では共存可能で、国家への義務を果たすのがキリスト教徒としての使命であり、神の意志に従うことだと考えられていた。その点からするとライシテを標榜する第三共和政国家は、熱心なカトリック教徒にも共和国の教師としての自覚を持たせることに十分に成功していたと言えそうである。そして、こうした女性たちによって共和国の辺境にまでフランス語や衛生観念などが行き渡ったことを強調しておこう。

視学官との対立は、シルヴに公・私を使い分ける教師としての技法を学ばせただろうし、自らが追求すべきライシテのあり方を考えるきっかけを与える事件であった。公・私の分離は、大多数の住民がカトリック教徒であり、熱心にミサに通う彼女たちが信者であることが一目瞭然である村においては、簡単なことではなかった。だが、子どもたちも教師が示

す態度からライシテの学校空間のあり方を徐々に学んでいったのである。

女性であることに關しては、シルヴの発言に見られたように、彼女たちは神が規定したとされる男女の差異、女性性に自覚的であり、母性主義の価値を賞賛し、当時の支配的ジェンダー観に同調していた。しかし、同時に彼女たちは決して私的領域に閉じこもっていたわけではなく、公立学校の教師として公的責務を果たし、女性の主体性・独立性の確保に敏感でもあった。視学官の圧力に屈せず自己の正当性を主張し闘う勇氣と行動力。小学校教師ながらもジャン・ギロー、エマニエル・ムニエ、ジャン・ギトンといった当代きつてのカトリック知識人と互角に議論を交わし、彼らを魅了する信仰心と教養、そして知性。アルプスの山奥にしながら定期購読者四〇〇〇名の雑誌を三〇年にわたって刊行し続けたエネルギー。ここには、熱心な信者であればこそ、公・私の領域を行き来し、自己実現を果たした女性たちの力強い姿を見つけることができる。そして、そうした彼女たちが独身でいたことはやはり、神への愛によるものだけでなく、男性優位な社会で男性と対等に生きるための、自らの自律性を保つための一つの自己防衛の手段であったのではないかと考えずにはいられない。

『オー・ダビデ』は若い女性教師たちに熱心に結婚を勧めていた。しかし、外部の目には、ダビデは明らかに独身を貫く集団に映っていた。グループとしてのダビデは、一九四六年に「教員チーム *Equipes enseignantes*」に吸収合併されるが、一九四二年に「教員チーム」に集った初期の女性メンバーはダビデに敬意を表しながらも、その独身集団という特徴を好まなかった。またダビデの雑誌は教授法に偏りすぎて靈性に関する記事が足らず、加えて対面での集会が少なすぎると感じていたようである。<sup>①</sup> 同じく信仰心のあついで、公立学校に勤める教師であっても、一九四〇年代の若者は価値観、生活スタイルに關して軸足の置き場を変えていった。結婚により大きな価値が見いだされ、信仰や精神性がより徹底して追求され、対面での集いが好まれるようになるという変化をどのように分析したらよいだろうか。社会の世俗化の進行と關係しているのだろうか。今後の課題とせざるを得ない。

また、本稿で論じられなかった問題に、強硬なライシテ主義の教員組合とダビデとの対立がある。ダビデが組合から激しい攻撃を受けたのは、熱心なカトリック教徒で独身であるというだけでなく、女性だったからという可能性は高い。山の小学校教師の立場でありながらカトリック知識人と対等に意見交換をし、相当数の定期購読者を集めることに成功したダビデたちに、男性の同業者は脅威や嫉妬を覚えたのだろうか。ダビデが関与したライシテをめぐる論争については稿を改めて検討したい。

① ダビデの現在の後継団体「公教育の中のキリスト教徒 *Chrétiens dans l'enseignement public*」のホームページに掲載されている論文を参照。「教員チーム」は二〇〇七年に「ユニヴェルシテ教区 *Paroisse universitaire*」という別組織と合体し、「公教育の中のキリスト教徒」に再編された。\* *Aux origines des Equipes*

*Enseignantes : une nouvelle génération d'institutrices* \*, 28 juillet 2013. <https://www.cdep-asso.org/cdep/notre-histoire/item/360-aux-origines-des-equipes-enseignantes-une-nouvelle-generation-d-institutrices.html>（最終閲覧日二〇二〇年一月九日）

（明治大学政治経済学部）

Faith and Profession: The World of the Davidées,  
Women Teachers during the Interwar Period in France

by

MAEDA Nobuko

This article considers the ideas and activities of the Davidées, a group of Catholic female teachers who worked in public schools. This is firstly an attempt to clarify the daily lives of female teachers in rural France during the Interwar period, and secondly an effort to present one case to help us understand how pious individuals adapted to the modern nation state that promoted laïcité as a national principle. The historical sources employed in this study are chiefly letters written by Marie Silve and Marthe Lagarde, who were leading members of the Davidées, records of the interviews of Marie Silve by the Catholic intellectuals Jean Guittou and Emmanuel Mounier, and the monthly *Aux Davidées*, published by the group itself.

The Davidées were created in 1916 in the sanctuary of Notre-Dame du Laus, located in the Southern Alps, where six female teachers, who were

newly graduated from the teacher-training college in Digne, met with the veteran teacher Mélanie Thivolle. These women were fervent Catholics, but at the time in the sphere of elementary educators there was, on the one hand, a powerful leftist teachers' union that would not recognize the teachers' faith, and, on the other hand, the Catholic church that condemned public schools as "schools of the devil" and encouraged the faithful to join private schools. Given these circumstances, the women founded the Davidées in order to fulfill their duties as public school teachers and at the same time to keep and even enhance their faith. The Davidées network, which valued their occupation and faith equally, gradually spread throughout the nation via their periodicals, library system and pilgrimages, and by the end of the 1920s they had attracted to their ranks approximately 10% of the female elementary teachers working in public schools. Carrying on their faith while fulfilling their mission as public school teachers for the Republic was for the Davidées something that could not only coexist, but in fact be complementary. Furthermore, both the Republic and Catholicism provided them intimate links to various people and gave them the means to advocate for and protect themselves. This article attempts to throw new light on the previous understanding of teachers in the time of the Third Republic from the viewpoints of religion and gender.

Key Words; public education, Catholicism, laïcité, French Third Republic,  
Alpine region